不定期刊行　　第412号　2011.09.28

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

## ヤズィックアグルの蒼い空 8　道を塞ぐ巨大な氷河

ヤズィックアグルに、朝日が当たり金色に輝いている。今日は、僕と久根さんが上部偵察、残りの4隊員は荷物整理とした。9:25　上部に向けて出発。本来なら昨年できていたはずの偵察である。左岸の台地を進んで沢を詰めて行く。10:40 正面にある大岩の基部に到着。この大岩は、地図やグーグルアースなどでも確認できる顕著なもので、事前にヌルさんから提供してもらった写真にもはっきり写っていたものだ。ここから沢が三つに分れているが、我々の進むべきは真ん中の沢である。後から来るキルギス人の 2 人のポーターが間違えないように道標の旗竿をたてていく。

11:30　4930m の地点で一本休憩を取っていると、ポーターが追いついてきた。荷物を背負い、1 時間ほど後に出発したのに、追いついてくるとは心強い。片言の英語同士で会話をし、片道およそ4ｋｍ、標高差600m、氷河があるはずだからその末端まで上げてくれと言うことを再確認した上で、一緒に登っていく。地図では休憩した地点からは沢を左に回り込んで 500m ほど進めば氷河が現れるはずだったが、なんと沢を曲がった瞬間にどでかい氷河が目の前に現れた。高さはおよそ 30m。セラックが林立するそれは予想以上の「でかさ」と「高さ」をもって我々を威圧するかのように立ちはだかっていた。地球温暖化の叫ばれる中、南面の氷河だから、後退しているだろうと思っていたが大間違いで、地図と見比べると、むしろ氷河は発達、前進していた。

12:00　沢の右岸のサイドモレーン上に平らな場所を見つけ、そこを ABC 予定地とした。今日もう一度上がってくる予定のポーターは先に帰し、我々は氷河を少し遡り偵察を試みることにした。80m ほどの幅の沢を塞ぐように立っている氷河の左岸のシュルンド沿いに進む。右側の斜面は高くそそり立ち、いつ崩れてもおかしくない。そんな氷河脇を 200m ほど詰めてみたが、このシュルンド沿いに延々と歩いてから氷河に乗るのがいいのか、それともダブルアックスを使ってでも氷河上に乗って氷河上を進むのがいいのか、判断が難しいところである。氷河の上がどのような状態になっているか見たいと思ったので、右手のやや張り出した脆い岩稜を少し登ってみる。そこから鳥瞰すると氷河上は、セラックの連続であり、かなり厳しいことがわかる。ABC から先はポーターは使えず、すべて僕ら自身が荷上げをしなければならないことを考えると、どちらのルートを選択するにしてもかなりの困難が予想される。いずれにしてもこの氷河のセラック帯を突破しないことには、登頂はできない。これが私たちに課せられた第

ABC を置いた氷河の舌端

1 関門であると思った。

とりあえず、今日は丸腰で何も道具を持っていないので、偵察はここまでとした。14:50 には BC に帰着した。BC では残った 4 人が荷上げ計画に沿って、ポーターに持ち上げてもらう装備や食糧の区分け・梱包作業などをしてくれていた。ミーティングでは、撮ってきた写真を見ながら、上部の様子を伝えた。当初は明日上部で氷河上に上がることも検討したが、無理はせず、高所順応を図ることにし、全員で ABC まで往復するということを確認した。

## 期待と不安の一日

7 月 24 日、7:30　アフタヌーンフラッド（午後の増水）がやってくる前に 2 往復すると言ってポーターが先発、僕らはその後おもむろに準備を始め、1 時間遅れで ABC に向かった。登り初めた直後から山内君がかなり辛そうである。先行の 4 人に遅れ、僕がしんがりとなり 2 人でじりじりと登っていく。大岩まではそれほど傾斜もなく足場も悪くないので歩きやすいのだが、それでも次の 1 歩がなかなか出ない。10 歩歩いては休み、30 歩進んでは立ち止まる。まあいい。今日は順応も兼ねて慢々で行こう。・・・しかし、ABC に到着したのは 13:40、5 時間近くかかっている。ABC に着いても、山内君は座ったきりなかなか立ち上がれない様子。しかし、このときは事態がそれほど切迫しているとは思っておらず、順応が遅れているというくらいの感覚で漫然としていた。14:30 に ABC を出発。天気がよかったせいで、アフタヌーンフラッドの勢いは激しく、渡渉点では何度も腿までつかるという憂き目にあった。

16:30 に BC に帰着すると、ヌルさんとグリさんが手打ちのラグ麺を用意して待っていてくれた。ヌルさんは今回連絡官、通訳、コックと一人で三役をこなしてくれているが、どの仕事も完璧で料理の腕前も見事で、メニューも豊富な上、味付けも申し分ない。しかし、山内君は重症でそのヌル料理に手が出ない。ずっと腹具合も悪かったのは、慣れない食事の影響もあるかも知れないと、自ら希望して日本から持ち込んだアルファ米と麻婆ナス丼を作ってはみたものの、一口食べた瞬間全く身体が受け付けないといってそのままテントで寝込んでしまった。薬が効いている間は熱も治まっているようだが、微熱状態、ずっと続いている下痢に加え、むくみも相当あり、見た目にも状態はかなり悪い。パルスオキシメータの値も 60 台を割った。ただ、今のところふらつきや意識の混濁などはまだない。

大岩の前で休む山内君

夕食時になっても改善しないので、山内君については明日は終日 BC にとどまり、隊長が付き添って様子を見ることにした。この段階でもしこれ以上悪化するようであるなら下山もやむなしという最悪の事態も想定した。山内君のテントを訪ねて、隊長と二人でそのことを伝えた。夜になって本人から時折咳が出始め、熱は 8 度を越え、下痢は治まらないので、下山したいという意向が伝えられた。そんなことでなかなか寝付けず、不安な一夜であった。